



多様性への攻撃にどう抗するか ——ジェイソン・アーディ教授が遺した問い

やました
山下

じゅんこ
順子

●ブリストル大学 社会学・政治学・国際学学科 准教授

今回のコラムでは、この夏にイギリスで起きた痛ましい事件について書き留めておきたい。このような事件は、形を変えて日本社会でも起きると思うからだ。はじめに、この文章には自死に関する記述が含まれるので、無理のない範囲でお読みいただければと思う¹。

4月に開催された今年度のイギリス社会学会の基調講演者は、ケンブリッジ大学教育学部教授のジェイソン・アーディ氏だった。アーディ氏は、教育における不平等や人種差別、脱植民地主義に基づく教育カリキュラムを専門とする教育社会学者である。彼はガーナ出身の両親の間に生まれたイギリス人で、2023年に37歳で同大学史上最年少の黒人の教授に任命された。

アーディ氏は自閉症と学習障害のために11歳までほぼ言葉を話せず、18歳まで十分な読み書きができなかった経歴を持つ。そのため、彼がケンブリッジ大学の教授職についた時は、研究業績よりもこの経歴と黒人最年少の教授であることが強調されて、全国ニュースとなった。大学側も彼の採用を、推進するDiversity, Equity and Inclusion (DEI) の象徴と位置付けていたと言われている。

る。

基調講演は、Wanted Dead or Alive : The Playbookと題された。意識すれば、「生死を問わず指名手配：その作戦術」といえようか。講演でアーディ氏は、民族的少数者、特に黒人の学者の業績が過剰に精査され、引用の不備や既存論文との類似箇所が見つけれ出され、メディアと連携して大学に圧力をかける、という組織的な攻撃が欧米で起きていることを話した。その一例として、着任7ヶ月で盗用疑惑をめぐり辞任に追い込まれたハーバード大学初の黒人女性学長 クラウディン・ゲイ氏 (Claudine Gay) の件に言及した。アーディ氏は、学術的誠実性や研究者の知的貢献を守るために設計された制度が「武器化」され、黒人を代表とする人種的・民族的少数者を要職から辞任させ、さらには人格否定にまで追い込む手段となっていること、そして社会学の将来のためにも、社会学者は連帯し、こうした攻撃に対抗するために自分たちのplaybook (手口・作戦術) を作り出す必要があることを訴えた。

会場でこの講演を聞いていた私には、穏やかな話し方に比して、アーディ氏の強い危機感が伝わ

1 悩みの相談先【#いのちSOS】0120・061・338 (24時間受け付け)、【いのちの電話】0120・783・556 (毎日午後4～9時)。



ケンブリッジでの追悼集会の様子（出典 Guardian, 2026年8月17日）

ってきた。このような状況に抗する連帯とはどのようなものになるかと考えながら、学会を後にした。

数ヶ月後の7月下旬、アーディ氏の盗作問題が新聞の一面に、テレビのトップニュースに、SNSに流れ始めた。さらに、彼の経歴に虚偽があるのではないかという疑いも報道された。社会学会でのあの話は彼自身のことだったのかと気づき、あの講演の後に彼に声をかけなかったことを悔やんだ。

BBCによれば、盗作疑惑のニュースは、自らを「人種リアリスト」論者と称する哲学者のネイサン・コフナス氏が、アーディ氏の研究に多数の盗作事例を発見したと主張したことから始まった。コフナス氏は、ケンブリッジ大学で研究職についていたが、「黒人は真の能力主義のもとでは要職からほとんど姿を消すはずだ」という趣旨の主張をしたことが非難され、2024年に解任されている²。

報道は日を追って増えた。8月5日に、アーディ氏は自身への激しい詮索による「個人的負荷」が「大きすぎた」と述べ、ケンブリッジ大学を辞任した。声明では、自ら経験したことは「学術的な意見の相違をはるかに超えたもの」で、「執拗（しつよう）な非難、臆測、そして世間の論評は、私自身と私の愛する人々にとって、深刻な負担となっている」と訴えたうえで、辞任は「私を取り巻く様々な言説を受け入れたと誤解されるべきではない」と記した³。その9日後、アーディ氏はロンドンの自宅で亡くなっているのを発見された。8月だけで、彼に関する主要なニュースメディアの記事は200本以上検出されている⁴。

盗作は許容されるものではない。学術的誠実性や信頼を担保し、学術的成果に基づく公正な議論と知識の発展のためにも、盗作を排除する制度は必要だ。また、アーディ氏の盗作を主張したのが誰であれ、検証はきちんと行われるべきである。ちなみに、博士号を出したリバプール・ジョン・

2 BBC「英ケンブリッジ大の元教授を遺体で発見、盗作疑惑の渦中に」2026年8月15日 <https://www.bbc.com/japanese/articles/c5y4zzvnj10o>

3 Guardian 'Cambridge professor Jason Arday resigns amid accusations of plagiarism' 2026年8月5日 <https://www.theguardian.com/education/2026/aug/05/cambridge-professor-jason-arday-resigns-amid-accusations-of-plagiarism>

4 Matt Walsh (2026) 'Jason Arday press coverage: analysis of the volume and type of articles' <https://theconversation.com/jason-arday-press-coverage-analysis-of-the-volume-and-type-of-articles-290282>

ムアーズ大学がアーディ氏の博士論文を再検証し、誤りはあるが盗作ではないと結論づけ、ケンブリッジ大学もその結果に同意している⁵。だが、仮にアーディ氏が盗作をしたとしても、その後を受けた批判や評価は度を超えていた。盗作の疑いで過去に辞任した他の白人男性の元ケンブリッジ大学教授らがほとんど報じられなかったのに比べ、アーディ氏の場合はメディアが熱心に取り上げ、また人格否定におよぶ記事も多数あった。

この事件の波及は広い。ケニア出身の博士学生は、博論を書き上げて学术界に残るべきかを改めて考えさせられた、と私に語った。中国出身の学生は、イギリスに残るのを怖く感じたといった。大学だけでなく、広く企業や社会で黒人や非白人の学生や若い人に挑戦することを躊躇わせる、そういう事件となったのだ。

日本でもD E Iという言葉が広がり、多様な人

に活躍の場を組織的に広める努力がはじまっている。これは高く評価され、さらに進められるべきだ。日本には、欧米が抱える「白人中心主義」や、黒人や民族的少数者に対する差別を生み出す構造と歴史は、同様な形では存在していない。日本で同じ機能を果たす軸は別にある。「健常で異性愛の日本人男性」を中心とした社会構造のもとで、女性、在日、外国人、障害者、性的マイノリティといった、周辺化された人々の業績、成功や過ちをどう評価し、またそれらがいかに評価されるのか。その評価や報道が不当であった場合、どのように対抗できるのか。冒頭に記した通り、同じことは日本でも起こってきたし、また起こりうるだろう。

ジェイソン・アーディ氏の冥福を祈る。

5 日本経済新聞「英ケンブリッジ大最年少の黒人教授が辞任 盗作疑惑は人種差別と反論」2026年8月 <https://www.nikkei.com/article/DGXZQ0UF069NC0W6A800C2000000/>